

## 2023年度 入学試験問題

# 国語

## (第4回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。なお、本文には設問上、省略したところがあります。

どうすれば平面思考から球面思考に脱皮できるのでしょうか。

そこで考えてみたいのが、私たちの言語における人称の問題です。やや唐突な印象を受けるかもしれませんが、球面思考は アイシヨウと自分の関係性や距離感が平面思考とは大きく変わりますから、人称にも影響を与えずにはいられません。

どんな言語でも、基本的に三つの人称があることは誰でも知っているでしょう。日本語の「私」や英語の「I」などの第一人称、「あなた」や「you」などの第二人称、それ以外のすべてを指す第三人称です。

言語に三つの人称があるということは、私たち人類が、この世のあらゆる関係性をこの三つを軸にして認識しているということにほかなりません。そして、実はこれが平面思考の根っこにもなっています。それは、三つの人称が点だと思えばイメージできるでしょう。点は、二つ結ぶと線になり、三つを結ぶと面になる。したがって、平面思考では人称が三つあれば事足りるわけです。

逆にいえば、人称が三つしかないことが、球面思考への転換を難しくしているということにもなるでしょう。第一人称から第三人称まででは、球面をしつかりと把握することができません。だとすれば、文法では認められていない「第四人称」を取り入れることが、球面思考への第一歩になります。

とはいえ、言語の中に存在しない第四人称は、四次元の世界と同じくらいイメージしにくいものです。いま、「あなた」は「私」の書いた本を読んでいるわけですが、「あなた」の近くに二人以上の人がいたとしても、それはみんな第三人称の存在であって、第四人称ではありません。人間以外のもの——あなたの座っている椅子や手元にあるコーヒークップなど——も第三人称の存在です。

しかし、だからといって第四人称的な立場が存在しないわけではありません。たとえば、道端で二人の男がケンカをしているとしましょう。この場合、当事者にとっては自分が第一人称、ケンカの相手が第二人称。とぼつちりを受けないように気をつけながら行き交う通行人や、「やめるやめる！」と仲裁に入る人がいれば第三人称です。

しかし、ケンカの周辺には、そのいづれとも違う立場でそれを見ている人がいます。とぼつちりを受けず、仲裁に入る必要もない距離から眺めている見物人です。怒りや恐怖に駆られている第一〜第三人称の人々とは違って、彼らはケンカを面白がることのできる。内心では「もつとやれ！」と思っているかもしれません。第一〜第三人称の人々が作る平面とは別の次元に立ってい

るから、第一く第三人称とはまったく違った見方ができるのです。

火事にも、同じような側面があります。当事者と同じ平面にいる人々は決して「もっとハデに燃えろ」などと思いませんが、その外側にいる無数のものは他人の不幸を美的に受け取ることが許される。だからこそ、「A」<sup>①</sup>というけしからん言葉も生まれたのでしょう。そうやって、一般的な道徳から離れた価値観を持つことができる立場こそが、ここである第四人称です。その原型が、演劇の観客であることはいまでもありません。たとえば劇中で殺人があつたと思います。舞台という平面上にいる登場人物たちにとって、それはあつてはならない悲惨な出来事です。ところが客席で見物している人々にとつてそれは作り話にすぎないので、誰も本気で嘆き悲しんだりはしない。むしろ事の成り行きを楽しむというところがあります。舞台上の世界がそのまま客席に持ち込まれることはありません。舞台と客席は同一平面上にはないのです。

その意味で、演劇は人間が最初に発見した「球面世界」だといえるでしょう。「平面世界」だとしたら、観客も舞台上の人々と同じ道徳律にしたがつて物事を判断しなければならぬでしょう。

そういう球面世界の論理を認めない哲学者も、かつてはいました。あのプラトンがそうです。プラトンは、道徳的に間違つたことを面白おかしく書く劇作家や詩人の存在が許せませんでした。そのため芸術的創作そのものを人間として間違つていると考え、認めようとしなかったのです。平面思考の考え方を代表していたことになるでしょう。

プラトンのあとに現れたアリストテレスは違いました。詩や演劇は人間にとつて面白いし、必要でもある。そう考えたアリストテレスは、絵空事のフィクションが許される理屈<sup>①</sup>を考えました。

そこから生まれたのが「カタルシス」という考え方でした。人間はふつうに生活をしていると、どうしても心の中に毒のような悪い感情が生まれてくる、それをそのままにしておくのは有害だとアリストテレスは考えます。たまつた悪いものを外へ出す解毒剤のような作用をするのが、フィクションだということです。かりに道徳的に間違つた感情が芽生えても、芝居で悪に触れれば、実際に暴れたりしなくても心の中がスッキリする。いわば「毒を以て毒を制す」ような発想だと思えばいいでしょう。だから悪を描く芸術的創造も存在が許される、というのがアリストテレスのカタルシス論です。

第三人称までの平面的な世界しか認めなかつたプラトンを乗り越えたという意味で、これは発明でした。創作で描かれる世界は、第四人称という球面世界で見ることこそ存在意義があるので。

もちろん私たちはふだん、自分が第四人称の立場にいることなど意識せずにフィクションを楽しんでいます。しかし実は、第四人称になれるかどうかは、受け手側にとつて大問題。小説にしても、もし読者が第一く第三人称の立場にしかねなければ、面白さが違つてきます。

たとえば、父親が作家として書いた※私小説を実の息子が読むケースなどはこれに近いかもしれ

れません。知り合いがケンカをしているのを見ても「もつとやれ！」とは思えないのと同様、肉親の作品を純粹じゆんすいに芸術作品として楽しむことはできないのです。

〔B〕の他人の書いた作品であつても、第四人称の立場で読むことができない人もいるでしょう。フィクションに対する感受性を持ち合わせていないと、作品世界の当事者のような気持ちになつてしまい、〔C〕みの見物ができません。道徳的に間違つた行動をする登場人物のことが許せなくなり、読み進めるのが嫌いやになつてしまつたりするのです。「文学のどこが面白いのかわからない」という人はたまにいますが、その多くはこういうタイプなのではないでしょうか。プラトンも、おそらくそうだったのだと思います。

こうした感受性は、個人差があるだけではありません。文化や社会によつても、第四人称の受け入れ方には差があるようです。たとえばアリストテレスがカタルシス論を唱えたギリシャでは、比較ひかく的早い時期から演劇が発達しました。他方、<sup>②</sup>演劇がなかなか発展しなかつたところもあります。ほかならぬ日本です。

日本は決して、芸術的創造の分野で諸外国に後おくれを取つていたわけではありません。『万葉集』や『源氏物語』などがあることを考えればわかるように、叙情じじゆうてき的な詩歌や物語に関しては世界中でも先進国といえるでしょう。ところが不思議なことに、能、狂言きやうげん、歌舞伎かぶきなどの演劇文化が花開いたのはかなり遅おそくなつてからです。

もしかすると、これは日本語の特徴とくちょうと関係があるのかもしれない。というのも、ヨーロッパの言語は第一人称の主語を大事にするのが基本です。主語がなければ、文が成り立たない。それに対して日本語は、たとえば「昨日、新宿に行きました」と主語を省略しても十分に文意が通ります。むしろ、いちいち「私は」と第一人称の主語をつけるとうるさいくらいです。

その背景には、西洋人とは異なる日本人独特の感受性があるのだと思います。実生活のなかでも、「俺おれが俺が」と出しゃばる人は、無用の摩擦まそつを起こす存在として煙たけむたがられます。だから言語も、第一人称をあまり重視しないものになつたのでしょう。その結果、人称がねんという概念そのものが、西洋の言語と異なるものになつたのです。

もしそうだとすれば、私たち日本人は第四人称になじみにくい性質を持つているのかもしれない。それは同時に球面思考が苦手だということを意味します。周囲に陸続きの外国のない島国であることも、そのイチインcかもしれませぬ。陸続きの異世界があれば、よその国の出来事を傍観ぼうかん的に面白がることができます。しかし島国の場合、目に入る出来事はどれも第一～第三人称の範囲はんい内になりやすい。つまり平面思考になりやすいということなのです。

もう少し具体的に、球面思考とはどんなものなのかを考えてみましょう。

第一～第三人称と第四人称の違いを見ればわかるように、平面世界の論理や価値観にとらわれずに別の考え方ができるのが球面思考の特徴です。そのため、同じ出来事や言葉についても、平面思考と球面思考ではその意味合いが大きく変わることがすくなくありません。

たとえば、<sup>③</sup>“A rolling stone gathers no moss.”（転がる石は苔こけをつけない）という英語のこと

わざがあります。いま初めてこれを知った人は、「だからどうした」と首をかしげたのではないのでしょうか。苔をつけないことが良いといたいのか、悪いといたいのか、よくわからないからです。

このことわざは、もともとイギリスで生まれました。ですからイギリス人は、「どういう意味だ？」と考えたりしません。彼らにとって、苔は財産や社会的信用といった良いものです。頻繁に転職をしたり、引越しをくり返したりなど、落ち着きのない人生を送っていると、その良いものが身につかない。つまり「転がる石」のような人間は成功しない——というのが、このことわざの意味になるのです。日本の「石の上にも三年」に近いニュアンスだと思えばいいでしょう。

しかし、これはイギリスという平面世界での意味です。このことわざが後にアメリカに渡ったとき、その意味は正反対で使われ始めました。アメリカ人は、苔を悪いものだと考えます。一カ所にじっとしていると、垢や錆びのような良くないものが溜まる。常にピカピカと輝きを放つ「転がる石」はのぞましい。アメリカ人は、そういう意味でこのことわざを使うのです。英語という同じ言葉でつながっているながら、生活が違うと意味がひっくり返ってしまう。

平面思考では、このアメリカ人の解釈は間違っているということになるでしょう。第一、第三人称の世界で暮らしている人にとって、同じ言葉が別の意味を持つのは受け入れがたいことです。実際、イギリスの辞書では、アメリカ人の使い方を認めていません。自分たちが使っている意味だけが書いてあります。一方のアメリカも、辞書でイギリスの「ゲンギは説明していない。どちらも平面思考で、ひとつのことわざにはひとつの意味しか認めていないのです。

ところが日本では、戦後、辞書にこの両方の意味が併記されるようになりました。それはそうでしょう。現実には二つの意味が使われている以上、どちらが正しいかを決めることはできません。「ところ変われば品変わる」ならぬ「ところ変われば意味変わる」というわけで、二つの意味が両立することを認めているわけです。イギリス人でもアメリカ人でもない第四人称的な立場だからこそ、日本人にはそれができました。いい換えると日本人はここでは球面思考が働いているのです。

これが、球面思考の本質とっていいでしょう。二つの対立する価値観を前にしたとき、第四人称的な立場から見れば白黒はつきりさせる必要はありません。それぞれの解釈を認めて、両方とも受け入れることができるのです。そこに新しい面白さが生まれます。

(外山滋比古『考えるとはどういうことか』より)

※私小説……作家自身や作家の周辺の人をモデルとした小説。



問7 本文の内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 演劇を楽しめるといふのは、観客として演じている役者と同じ次元に立つて共感することができるといふことである。

2 日本語で第一人称の主語があいまいになるのは、「私」を出し過ぎてしまうと周囲との不和を生むことに由来している。

3 日本人にとって第四人称という考え方は、頭の中では理解できても現実的には受け入れられないものである。

4 「球面思考」が広まることによって、テクノロジーが発展し、より大きな世界と強い結びつきがうまれていく。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ピアノの調律師である「僕」は、先輩調律師の柳さんのお客さんであるふたごの姉妹・由仁と和音と出会った。二人はいつも連弾れんだんをしており、魅力的な演奏みりやうてきをしていた。ところがある日、由仁が病気でピアノを弾けなくなつたことで和音もピアノを弾けなくなつてしまった。「僕」と柳さんは姉妹を心配していたが、しばらくして再び姉妹から調律の依頼いらいがきた。

予定を合わせて佐倉家を訪問できたのは、一週間後の午後遅い時間だった。

佐倉さんの奥さんが、穏やかな笑顔で出迎えてくれた。

「お待ちしていました」

奥からふたごが出てきて、揃そろつてお辞儀じぎをした。

「お久しぶりです」

「お騒がせしました」

明るい声でほっとした。

「またよろしくお願いします」

「こちらこそ」

柳さんにもこやかに答える。

「また調律に呼んでいただけでうれしいです」

後ろで僕も頭を下げる。ほんとうに、連絡れんらくがない間ずっと□□に大きな石がつかえているみたいだった。それが、ようやく動いた。

ピアノのある部屋へ通されて、

「何かリクエストはありますか」

柳さんが聞く。

「おまかせします」

ふたごは声を揃えた。

「では、何かありましたらいつでもおっしゃってください」

彼女たちが部屋から出ていくと、柳さんは上着を脱いでピアノの椅子に置いた。

よく磨かれた黒いピアノを開ける。トーン、と白鍵はっけんを叩く。基準音きんじゆんのラはほとんど狂くるっていない。

柳さんの調律をこうして近くで見ると、見るのも久しぶりだった。この頃は単独で調律するばかりだ。ふたりで来てほしいという依頼の理由を考える。どうして僕も呼んだのだろう。以前、由仁が店へ来て、病氣のことを話してくれた。そうした以上は僕にも声をかけるのが礼儀だと思つたのか。

柳さんが調律している間、いろいろな考えが浮かんでは消える。

この部屋は防音のしすぎだ。ピアノの足に防音装置を付けているのはもちろん、その下に毛足



の長いカーペットを敷き、窓には分厚い防音カーテンが二重に掛けられている。前に来たときは、ずいぶん慎重な家庭なのだろうと思っただけだった。マンションだからしかたがないのだろう、でも、今は別の気持が強くなっている。もったいない。これではせっかくのピアノの音が半分は吸い込まれていってしまうだろう。和音の弾くピアノの魅力も半減してしまうということだ。そう気づいたら、<sup>①</sup>ぞくぞくした。半減して、あれか。

柳さんが弦の下に布を挟む作業をしている間に、両手を叩いてみる。ぱん、と乾いた音が鳴ってすぐに消える。残響はほとんどない。さらに、窓の上から床まで下ろされた防音カーテンを開けて、また両手を叩いてみる。ぱんっ。わずかながら、はつきりと残響が長く聞こえた。昼間に弾くときぐらいは、この重いカーテンを開けて弾いてもいいんじゃないだろうか。

「閉めて」

ピアノに屈みこんだまま、柳さんが言う。

「いつも閉まつてんだから、閉めた状態で調律したい」

「でも、もったいないです。開けて弾いたほうがいいです」

「<sup>②</sup>わがままだなあ」

「えっ」

驚いた声に、柳さんが顔を上げる。

「なに驚いてんだ」

「すみません」

わがままだと言われたのは、記憶にある限り、生まれて初めてのことだ。

「わがまま、つて、あの、僕のことでしょうか」

思わず確かめると、柳さんは眉間に皺を寄せてこちらを睨んだ。

「この部屋にいるのは誰だ。俺と外村だ。そして、俺は今仕事をしている。わがままは言つてないつもりだ。俺がわがままじゃないとしたら、さて、誰がわがままだと思う」

「はい」

右手を挙げた僕に、よろしい、と柳さんはうなずいてみせた。

(中略)

「終わりました」

ドアを開けて、柳さんが声をかける。すぐに奥さんとふたごが入ってきた。

「前と同じ状態に調律しておきました」

柳さんが簡単に説明すると、<sup>③</sup>由仁は少し不服そうだった。

「あのう、私たちは前と同じじゃないですけど」

まっすぐに柳さんの目を見ながら言う。

「ピアノは同じにしておくほうがいいと思います。あなたたちが変わったのなら、きつと以前とは違う音色になります。それを確かめるのも大事なことだと思います」

由仁はわずかに首を傾けたまま黙っていたが、僕を見て言った。

「外村さんはどう思いますか」

僕がどう思うか聞きたくて呼んだわけではないと思うのに。しばらく由仁のまなざしを感じていたが、

「わかりません」

正直に答えると、視線が外されるのがわかった。

「弾いてもらわないと、わかりません。試しに弾いてみてもらえますか」

和音がうなずいた。

以前は、試しに弾くのも連弾だった。ピアノの前にふたりで並んですわっていたふたご。観る、などと言うと芸か何かのようだけれど、艶のある黒い楽器の前に、ふたごが並んですわったとき、聴くよりもまず観るよるこびが胸の中で弾けた。こんなにもいいものを僕ひとりで観てしまっているのか、という思い。どこかの音楽家によってあらかじめ書かれていた曲だとは思えないほど、ピアノから生まれてくるのは彼女たちの音楽だった。

由仁のピアノは魅力的だった。華やかで、縦横無尽に走る奔放さがあった。人生の明るいところ、楽しいところを際立たせるようなピアノ。対して、和音のピアノは静かだった。静かな、森の中にこんこんと湧き出る泉のような印象だ。これからどうなるのだろうか。ふたりのピアノがひとりのピアノになって、それでも泉は泉でいられるのだろうか。

でも、和音がたったひとりでピアノの前にすわったとき、はっとした。背中が毅然としていた。白い指を鍵盤に乗せ、静かな曲が始まった瞬間に、<sup>④</sup>記憶も雑念も、どこかへ飛んでしまった。

音楽が始まる前からすでに音楽を聴いていた気がした。今このときにしか聴けない音楽。和音の今が込められている。でも、ずっと続いていた音楽。短い曲を弾く間に、何度も何度も波が来た。和音のピアノは世界とつながる泉で、涸れるどころか、誰も聴く人がいなかったとしてもずっと湧き出続けているのだった。

ピアノの向こう側に、和音を見つめる由仁の横顔があった。<sup>⑤</sup>頬が紅潮している。由仁は弾けなくなったのに、和音は弾く。耐えられるだろうか、と案じてしまったことが恥ずかしい。由仁こそ和音の泉を一番に信じていたのだろう。

短い曲が終わった。調律の具合を確かめるための軽い試し弾きかと思っただけれど、違った。和音の決意がはつきりと聞こえた。和音は椅子から立ち上がり、こちらに向かつてきちんとお辞儀をした。

「ありがとうございます」

こちらこそ、と答える代わりに拍手をした。由仁も、奥さんも、柳さんも、拍手をしていた。

「心配かけてごめんなさい」

和音が言った。そうして、次の言葉を発するために息を吸い込んだときに、僕にはもう和音が

何を言おうとしているのかわかってしまった。

「私、ピアノを始めることにした」

和音のピアノはもう始まっている。とつくの昔に始まっている。本人が気づいていなかっただけで。ピアノから離れることなんて、できるわけがなかった。

「ピアノリストになりたい」

静かな声に、確かな意志が宿っていた。まるで和音のピアノの音色みたいに。由仁の頭がぴよこんと跳ねた。

「プロを目指すってことだよ」

晴れやかな声だった。うきうきと弾む声。和音はようやく表情を和らげてうなずいた。

「目指す」

「ピアノで食べていける人なんてひと握りの人だけよ」

奥さんが早口で言った。言ったそばから、自分の言葉など聞き流してほしいと思っているのがじんじん伝わってきた。ひと握りの人だけだからあきらめろだなんて、言ってはいけない。けど、言わずにはいられない。そういう声だった。

「ピアノで食べていこうなんて思っただけ」

和音は言った。

⑥ 「ピアノを食べて生きていくんだよ」

部屋にいる全員が息を飲んで和音を見た。和音の、静かに微笑んでいるような顔。でも、黒い瞳が輝いていた。きれいだ、と思った。

いつのまに和音はこんなに強くなったんだろう。ほれぼれと和音の顔を見る。きつと前からこの子の中にあつたものが、由仁が弾けなくなったことで、<sup>ウけんざい</sup>顕在化したのだと思う。そうだとしたら、悪いことばかりじゃない。⑦ 由仁のことはとても残念だけれど。とても、とても残念だけれど。

(宮下奈都『羊と鋼の森』より)

問1 〰〰線ア〜ウのことばの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア「眉間に皺を寄せて」

- |                              |          |
|------------------------------|----------|
| 1 疑いを持った様子で                  | 2 残念そうに  |
| 3 不機嫌 <small>きげん</small> そうに | 4 驚いた様子で |

イ「毅然と」

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 1 信念を持ち物事に動じない様子で | 2 喜びに満ちあふれている様子で                       |
| 3 心配そうにおびえている様子で  | 4 重圧に負けないように鼓舞 <small>こぶ</small> する様子で |

ウ「顕在」

- |                                     |               |
|-------------------------------------|---------------|
| 1 逃げる <small>に</small> ことができず追い込まれる | 2 意思がしっかりと固まる |
| 3 急速に成長を遂 <small>と</small> げる       | 4 はっきりとあらわれる  |

問2 空らん  には身体の一部をあらわすことばが入ります。そのことばをひらがなで答えなさい。

問3 ——線①「ぞくぞくした」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 音を奏そうでるには物足りない環境かんきょうではあるものの、それを調律で補うことのできる柳さんの技術の高さを久しぶりに見たから。
- 2 音の良さを引き出す最高の環境だとは決して言えない中でも魅力ある演奏をしていた和音の才能の高さを改めて感じたから。
- 3 環境を工夫するだけで音が劇的に向上することを柳さんから学び、自分自身の手でも工夫を凝こらしたい衝動しょうどうに駆かられたから。
- 4 佐倉さんの担当ではない自分が訪問することに疑問を感じていたが、部屋の構造を見た瞬間に呼ばれた意味を理解したから。

問4 ——線②「わがままだなあ」とありますが、「僕」のどのようなところを「わがまま」と感じたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 柳さんが優先しようとするものがあるにも関わらず、自分の考えに合わせた調律にこだわろうとするところ。

2 担当は柳さんであるにも関わらず、その柳さんに聞くこともせず勝手に勝手に行動を起こしてしまうところ。

3 お客さんからの依頼が二人にきたにも関わらず、調律の仕事を手伝うこともせずに遊んでしまうところ。

4 今まで一緒に仕事をしてきたにも関わらず、くらやみで調律することを好む柳さんを理解していないところ。

問5 ——線③「由仁は少し不服そうだった」とありますが、由仁が求めていたのはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 簡単な説明で終わることのない心がこめられた調律をもらうこと。

2 現在の由仁の演奏力を最大限に引き出せる調律をもらうこと。

3 柳さんにはなく、想いを寄せている「僕」に調律をもらうこと。

4 由仁と和音をめぐる状況の変化に合わせた調律をしてもらうこと。

問6 ——線④「記憶」とありますが、それは何の記憶ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 由仁がピアノの演奏をあきらめるきっかけとなった病気についての記憶。

2 「僕」が以前に学んだピアノの演奏に関する知識や経験についての記憶。

3 佐倉家での調律時に起こった柳さんと「僕」との口げんかについての記憶。

4 姉妹での連弾時の様子やその時に奏でていたピアノの音色についての記憶。



問7 ——線⑤「頬が紅潮している」とありますが、この由仁の表情を「僕」はどのように考えていますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 和音の才能を見ぬいている由仁は、自分が病気でピアノを弾けなくなった後の和音を心配する一方で、和音が再びピアノを弾きはじめることを信じてきた。その和音がピアノを再開したことに加え、今までよりも魅力のある演奏をしたことに由仁は胸を躍らせていると考えている。

- 2 病気によりピアノを弾けなくなってしまった由仁は、一人でピアノを弾かなければならぬ和音の今後を心配する一方で、和音が自立することを信じてきた。その和音がピアノを再開したことに加え、不安げながらも大丈夫な姿を示してくれたことを由仁は嬉しく思っていると考えている。

- 3 病気によりピアノを弾けなくなってしまった由仁は、プロになる夢をたくされた和音への重圧を心配する一方で、和音が重圧をはねのけてくれることを信じてきた。その和音がピアノを再開したことに加え、プロになる意志をかためてくれたことに由仁は感動していると考えている。

- 4 和音の才能を見ぬいている由仁は、自分の病気が原因で和音の演奏に影響してしまうことを心配する一方で、和音がその課題を克服してくれることを信じてきた。その和音がピアノを再開したことに加え、以前よりも表現豊かな演奏をしたことに由仁は安心して考えている。

問8 ——線⑥「ピアノを食べて生きていく」とありますが、それはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 趣味であるピアノに没頭することで心を豊かにして生きていくこと。
- 2 自分の演奏技術に対する周りの評価を意識しながら生きていくこと。
- 3 お金を得るためにピアノの演奏技術を売り物にして生きていくこと。
- 4 自分自身の内に活力を蓄えるべくピアノを演奏して生きていくこと。

問9

——線⑦「由仁のことはとても残念だけれど。とても、とても残念だけれど。」とありますが、ここには「僕」のどのような気持ちが含まれていますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 由仁がピアノをあきらめたことを気の毒に感じる一方で、由仁の実力ではプロになることが難しいことを知っているためこの決断に納得している。
- 2 由仁と和音の姉妹でプロになる夢がついえたことを悔やむ一方で、以前から応援している和音がピアノを継続してくれたことに安心している。
- 3 由仁が病気になってしまったことを悲しむ一方で、その病気をきっかけに成長した和音を不謹慎であることを十分に理解しつつ喜んでいる。
- 4 和音がピアノを再開してくれたことを嬉しく感じる一方で、本心を隠しながら闘病中でも気丈にふるまっている由仁の精神面を心配している。

3 次の俳句について、後の問いに答えなさい。

① 女の子たなほただけ七夕竹をうち担かつぎ 高野 素十

② 背泳ぎで行く夕焼の真下まで 平田 明美

③ 柏餅かしもち食べて葉をたたむ四つ折に 山口 青邨

④ 考えへる人のごとくに山眠やまねむる 池田 功

⑤ 白樺しろがほを幽かすかに霧きりのゆく音が 水原秋桜子

⑥ 大原おほはらや蝶ちようの出いて舞まふ朧おぼろ月 内藤 丈草

問1 次の説明にあてはまる俳句として、最もふさわしいものを①～⑥からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1 幻想げんそう的な美しい春景色に、浮うかれ出たかのような印象を受ける句です。この句が詠よまれた場所も重要で、切れ字が用いられています。

2 命あるものがみな活動をとめてもの音ひとつしなない、ひっそりと静まりかえった冬の情景が浮かんできます。比喩が用いられています。

3 いま目めにしている美しいものを一瞬ひとしげたりとも見逃みのがすまいという作者の気持ちが読み取れる夏の句です。倒置法が用いられています。

問2 ⑤の句の季語を答えなさい。

問3 ①～⑥を季節によって分けたとき、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1	【⑤⑥】	【③】	【①②】	【④】
2	【⑥】	【②③】	【①⑤】	【④】
3	【③⑥】	【②】	【①】	【④⑤】
4	【③】	【①⑤】	【②】	【④⑥】



(問題は次のページに続きます)



4 次の①～⑤について、後の問いに答えなさい。

① 葦よしのずいから天井てんじょうのぞく

② 身みから出た錆さび

③ 犬も歩けば棒ぼうにあたる

④ 負けるが勝ち

⑤ 水を得た魚

問1 ①と似た意味の表現になるように、次の空らん  に漢字二字のことばを入れなさい。  
井の中の蛙かき  を知らず

問2 ②と似た意味の四字熟語となるように、次の二つの空らん  a  b にそれぞれ漢字を入れなさい。

自  a 自  b

問3 ③は、よい意味でも悪い意味でも使われますが、よい意味で用いた場合に似た意味となるものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 猫ねこに小判

2 出る杭くわは打たれる

3 たなからぼた餅もち

4 うわさをすれば影かげがさす

問4 ④について、その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 あり得ないことが起こることを、大げさに述べたことば。

2 負け惜おしみが強いということを、比喩的に述べたことば。

3 斜しやに構えた態度をとることを、皮肉っぽく述べたことば。

4 先を見とおして行動することを、逆説的に述べたことば。

問5 ⑤と対照的な意味のものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 馬の耳に念仏ねんぶつ
- 2 のれんに腕押しうでお
- 3 青菜に塩
- 4 猫ねこに小判



